在華プロテスタント宣教師の日記に見える日露戦争末期の京都・神戸・大阪

土肥　歩

はじめに

本稿は、中国広東省で活動していたニュージーランド長老教会宣教師ジョージ・ハンター・マクニュール（George Hunter McNeur. 以下、マクニュール）の日記を用いて、日露戦争末期の京都・神戸・大阪の様子を紹介することを目的としている。マクニュールは一八七四年一二月にニュージーランドに出生し、一九〇一年末にニュージーランド長老教会の宣教師の一人として広東省に派遣され、以後一九三八年ごろまでキリスト教伝道に従事した人物である。(1)

本稿と関連する先行研究は二種類存在する。一つは、日露戦争時期の銃後の社会や民衆の動向に焦点を当てた研究である。たとえば、新聞資料に依拠しつつ、日清戦争と日露戦争の推移を庶民の視点から論じた大濱徹也(2)『京都府日露時局記事』を用いて地域経済の動向を論じた藤井松一、行政文書や新聞資料から京都の社会的変容を考察した竹本知行、さらに幻灯機の映写活動からメディアの転換点を論じた上田学の研究などがある。(3)

もう一つは、日露戦争時期と外国人をめぐる研究である。たとえば、中村健之介は幕末に来日したハリストス正教会の大主教ニコライ（Nikolai）の日記を手掛かりに、日露戦争中のニコライの葛藤や受難の様子を紹介している[4]。また、小泉凡の研究では小泉八雲（ラフカディオ・ハーン。Lafcadio Hearn）が最晩年に行った日露戦争中の言論活動が紹介されている[5]。近年では、日本政府が日清・日露戦争中に行った外国人従軍に対する各種規制の実態に迫った石本理彩の研究が注目される[6]。

しかし、前者の研究では同時代の外国語資料に主眼が置かれていたわけではなく、後者の研究では交戦国の外国人、従軍記者、さらには著名な日本研究者に関心が向けられてきた。そのため、これまで研究対象とされてこなかった外国人が残した記録に着目し、そこに残された記録の紹介や史料的性格を分析する必要がある。

以上の問題意識を踏まえ、本稿ではニュージーランド長老教会の宣教師として広東省で活動していたマクニュールの関連資料に着目する。ニュージーランドのオタゴ大学ホックンコレクションが所蔵する『マクニュール家族文書（*McNeur Family. Papers*）』には一九〇五年八月から九月までの日本旅行の様子を記述した日記（請求記号　MS-1007-006/009）が保管されており、日露戦争中の外国人の動向や民衆生活を知るうえで重要な手掛かりになると考えられる。

以下、第一章では、マクニュールの日本訪問に関する概要を紹介する。つづく第二章では、日記を通じて戦時下の社会を復元する。そして第三章では日露戦争終結前後の様子を紹介する[7]。

なお、日記の記述を逐語訳した場合は本文中に原文を、それ以外で重要な場合は注に原文を付した。さらに日記の日付は本文中の丸括弧内に表記した。ただし、日記の判読にはさらに時間を要するうえに、本稿執筆段階で十分に確認できなかった事実関係も少なからず存在するため、本稿は発展的な研究に向けての試論であることを

ご了承いただきたい。

第一章　日本訪問の概要

第一節　日本訪問の経緯と同行者

マクニュールの日本訪問は休暇を目的として計画されたと考えられる。『マクニュール家族文書』におさめられた一九〇三年から一九〇五年までの日記（MS-1007-009/002, MS-1007-009/003）によれば、北米長老教会ミッション宣教師のボッグス（J. J. Boggs）と「日本についての話」をしたとの記述が一九〇五年四月二〇日にあり、このころから日本渡航を計画し始めたようである。[8] 六月五日にはボッグスと日本について話し、「座席を予約する予定」とあるため、船便の手配を行っていたことがうかがえる。[9] そして、日本渡航の計画を立てているときに、マカオで活動していたカナダ長老教会ミッション宣教師のマッケイ（W. R. Mackay. 日記ではMcKayと表記される）夫妻も同行を希望したようである。[10]

ただし、日本訪問は一時的に延期された。マクニュールの同僚であったモーソン（W. Mawson）によれば、マクニュールとその妻マーガレット（Margaret. 日記ではMaggieもしくはMagと表記される）は七月四日に広州を出発し、日本で「数週間の休暇」を過ごそうと考えていたが、六月二八日にマーガレットがマラリアに罹患したため、渡航延期を余儀なくされた、とする。[11] しかし、同行者のボッグスは七月四日に先に日本へ出発している。[12]

その後、マクニュールはマーガレットの容体回復をうけて、日本渡航を決断したものの、広州と香港をつなぐ

汽船の乗降に際しても「マクニュール夫人を簡易ベッドで運んだ」とあるように、彼女の体調は万全ではなかった。そのため、マクニュールは日本で彼女の療養を行おうと考えていたのだろう。[13] 以上の経緯から、日本渡航の目的が「数週間の休暇」であり、妻マーガレットの病気療養も兼ねていたとみられる。

ただし、マクニュールが、広東省での伝道活動を始めて以来、日本に興味を抱いていたことも事実である。まず、日露戦争が勃発した一報を受けたマクニュールは、「絶対に日本の側に立つ」と記している。[14] 次に、彼が活動していた広東省の農村には日本に滞在経験のある中国人が住んでおり、[15] そのような人物がマクニュールに日本の様子を語っていた可能性があるだろう。さらに、広州の郊外に居住していた日本人僧侶のもとを訪れ、その通訳と言葉を交わしている。[16] 会話の内容や日本人僧侶の素性は不明であるが、マクニュールが日本に関する情報を伝え聞いた可能性がある。以上のことから、休暇を利用した日本渡航の背後には、日本に対する興味関心が存在したとも解釈できる。

次に、マクニュールの日本旅行の同行者について改めて整理すると、マクニュールの妻マーガレット、ボッグス夫妻、マッケイ夫妻、さらにウェスレー派ミッション宣教師のアンダーソン（W. J. Anderson）夫妻の合計八人と考えられる。このうち、ボッグス氏について、マクニュールは広州郊外のある村を訪れた時、「その村で豚毛の会社を経営し、日本に住んでいたことのあるローという男性にあった。ボッグス氏と彼は日本語で会話した」というエピソードを紹介していることから、彼が日本語を知っていたことがわかる。[17] また、神戸港に到着してボッグスとマッケイがマクニュール一行を出迎えた際、「彼らと会い、ボッグス氏の経験の助けを借りることができてうれしかったDelighted to see them & have the benefit of Mr. Boggs' experience.」とするように、ボッグスの経験（おそらく日本語の能力）を頼りにしていたのだろうと推測される（Aug. 8）。

なお、日記に登場する在日外国人や宣教師の経歴調査は今後の課題としたい。

第二節　マクニュールの日本滞在日程

マクニュールの日記に依拠すれば、その活動記録を次のようにまとめることができる。[18]

八月　一日　香港から上海に向けて出発する。
八月　三日　上海に一時寄港。
八月　六日　長崎港に到着。
八月　八日　神戸港に到着。ボッグス氏とマッケイ氏が出迎える。
　　電車に乗って三田に向かう。人力車で有馬温泉に向かい、清水ホテルに投宿する。
八月　九日　有馬温泉周辺を観光。金泉や太鼓滝を見る。
八月一〇日　ボッグス氏や女性たちと売店をめぐり、古い公園を歩く。
八月一一日　午前、三田から電車に乗る。
　　福知山で乗り換え舞鶴駅到着。宮津に移動し、天橋立を見物、ホテル投宿。
八月一二日　知恩寺、妙見山を観光。
　　午前一〇時四〇分、宿を引き払い、有馬に戻る。
八月一三日　午前一〇時、礼拝に参加する。夜、礼拝に参加する。
八月一四日　有馬周辺で山登り。外国人と交流。
八月一五日　有馬周辺を散策。午後五時、山登り。

八月一六日　有馬周辺を散策。夜、祈祷集会に参加。
八月一七日　読書などで過ごす。夕方、公園に出かける。
八月一八日　ボッグス氏、マッケイ氏とともに住吉から三宮に出る。
八月一九日　午前および午後、周辺を散策。
八月二〇日　午前一〇時、礼拝に出席。午後、説教を行う。
八月二一日　周辺を散策。
八月二二日　周辺を散策、山登り。
八月二三日　山登り。
八月二四日　午前九時四五分　住吉から電車で三宮へ向かう。書店で買い物。
八月二五日　午前、イザベラ・バードの著作を読む。午後、周辺を散策。
八月二六日　聖書の学習。周辺を散策。
八月二七日　礼拝に出席。
八月二八日　ボッグス氏、マッケイ氏とともに生瀬駅から大阪へ向かう。
　　書店で買い物。
八月二九日　頭痛のため静養。午後、六甲山に登る。
八月三〇日　買い物。祈祷集会。
八月三一日　散策。六甲山に登る。
九月　一日　聖書の学習。中国語の勉強。散策。

九月　二日　午前六時、朝食。その後、六甲山を越えて神戸へ向かう。
住吉から電車で三宮へ向かう。買い物と食事。
中国へ向かうボッグス夫妻とマッケイ夫妻に別れを告げる。
九月　三日　礼拝に出席。稲荷山に登る。
九月　四日　散策、聖書の学習。読書。午後四時、山登り。
九月　五日　勉強、読書、山登り、神社訪問。
九月　六日　散策、聖書の学習。
九月　七日　聖書の学習。散策。
九月　八日　滝の見物。炭酸泉を見学。
九月　九日　生瀬駅から大阪へ向かう。書店で買い物。
九月一〇日　説教を行う。
九月一一日　聖書の学習。
九月一二日　温泉まで歩く。午後、散策。
九月一三日　読書。
九月一四日　聖書の学習とお祈り。マッキルワイン（McIlwaine）氏と山登り。
九月一五日　荷造り。午後、散策。
九月一六日　午前八時一五分、清水ホテルを出発する。
生瀬駅から電車に乗り神戸に到着する。

九月一七日　午後、アンダーソン氏とともに乗船する。
　当日の出港が取りやめとなり、ホテルに投宿。
九月一八日　出港
九月二六日　午後三時半、九龍に到着。
九月二七日　広州到着。同僚のモーソン夫妻の出迎えを受ける。

第二章　日記に見える戦時下の京都・神戸・大阪

第一節　銃後の社会と民衆の生活

では、八月六日から九月一八日に至る日本滞在中、マクニュールはその社会の様子をどのように描写したのか。日記の各所には軍事施設や出征の様子が記録されている。

まず、天橋立観光を終えて、鉄道で三田駅に戻る途中、「福知山で大勢の兵士たちが鉄道に乗って前線に向かおうとするのを見かけた。そして、多くの駅では旗が振られていたAt Fukuchiyama saw a regiment of soldiers boarding a train to go to the front & at many of the stations flags were flying」と書き記す（Aug. 12）。福知山町（現在の福知山市）には第二〇歩兵連隊（福知山連隊）の本部が置かれていた。この連隊は一八八五年五月に編成され、日清戦争後は第一〇師団歩兵第二〇旅団に属していた[19]。一九〇四年二月一〇日の宣戦布告の後、同連隊は五月には遼東半島に上陸し、栃木城周辺での戦闘（一九〇四年七月）、遼陽会戦（一九〇四年八月末）、沙河会戦（一九〇四年一〇月）などに参加した。そして奉天会戦（一九〇五年二月から三月）の後は、ロシア軍

の南下に備えて奉天市南東部に駐屯していた。[20] 日記に見える記述は、この連隊に配属される補充兵の出征の様子と思われる。

八月一四日にはマーガレットと有馬温泉付近を散策していた時、「前線に向かう数人の有馬の兵士たちを見送っていた群衆に出会った Met a crowd of people who had been seeing some Arima soldiers off for the front.」としている。その日の午後、マクニュールはボッグスと神社の境内の様子を観察していた。このとき、「〔前略〕二人の兵士がやってきて、神の注意をひくためにガラガラ〔鈴緒か〕を鳴らし、願掛けを行った A bundle of large rattles in front of door with rope suspended. While we were there two soldiers came up & shaking the rattles to attract the god's attention, made their petitions」とする（Aug. 14）。

最後に、大阪訪問でも同様の記述は見られた。たとえば、「大阪への三等車両は三三銭。帝国で二番目の、その大都市に時間通りに到着すると満洲にむかう兵士とウマを乗せた軍用列車が出発するのを見かけた Third-class to Osaka 33 sen. Arrived at that great city — second in empire — just in time to see a troop train leave with soldiers & horses for Manchuria」（Aug. 28）。九月九日も「鉄道で大阪へ。そして再び時間通りに到着すると、軍用列車の出発を見かけた Rail to Osaka & again arrived just in time to see a troop train depart.」（Sep. 9）としている。

後述の通り、八月一〇日にはポーツマスで講和会議が始まり、戦争終結に向けての交渉が進められていた。しかし、最前線の歩兵第二〇連隊がロシア軍と休戦協定を結ぶのは九月一三日のことであり、[21] 銃後の社会や出征兵士にとって予断を許さない状況が続いていたといえる。

マクニュールの日記には負傷兵の描写も見られる。有馬温泉に到着したばかりのマクニュールは「数百人の日

本人兵士がロシアの弾丸から〔ママ〕回復するまでここに宿営しているSeveral hundreds of Japanese soldiers are quartered here until they recover from the Russian bullets.」と、数百人の負傷兵が有馬温泉に滞在していることを記録している（Aug. 8）。有馬温泉滞在中のマクニュールは日常的に負傷兵を目にしていたのではないかと推測できるが、その後の記述では全く見られない。

つづいて、民衆の経済状況についても、日記に若干の言及がある。一九〇四年二月に宣戦布告が行われると、その翌月に召集された臨時帝国議会は非常特別税法を可決する。この法律の目的は増税によって戦費を獲得することにあり、地租、営業税、所得税、酒税、砂糖消費税、醤油税、登録税、印紙税、関税などが増徴された。翌年一月には非常特別税法が改正され、新たに通行税と相続税の新設と塩専売が決定された[22]。これに加えて、一九〇四年から一九〇五年にかけて合計五回の国債発行が行われると同時に[23]、物資の徴発による日用生活品の不足や、増税による食糧品など生活必需品の高騰が民衆生活を圧迫することとなった[24]。

管見の限り、マクニュールは民衆の生活苦に関してのエピソードを二つだけ紹介している。一つは、天橋立に向かうために鉄道に乗車したときに、「私たちはいつも数セントを戦争税として鉄道運賃に上乗せしたA few cents we always added to railway fare as war tax.」とした記述である（Aug. 11）。もう一つは、三宮市内で文房具店を経営する広東出身の中国人に出会って言葉を交わしたとき、「彼は戦争の結果起こった不景気を強く嘆いたFound a Cantonese stationary shop & had a talk with the proprietor. He deplored very much the hard times consequent on the war.」とした記述である（Aug. 18）。

ただし、彼が民衆への視点を欠いていたわけではなく、政府の民衆に対する締め付けに興味関心を寄せていたと考えるほうが正確だろう。マクニュールは「日本では、政府がすべてのホテルや寄宿舎において、肺病のため

にたん壺を置くべきであると要求している。〔中略〕政府は結核の損害をなくすためにできることを行っている。おそらく、世界で日本のそれほど干渉主義的な政府は存在しないだろう。国民が愛国的で「バンザイ」を叫ぶのも不思議ではない。In all hotels & boarding houses in Japan the Govt requires that spit[t]oons shall be placed for the use of consumptions [...] The Govt is doing what it can to decrease the ravages of tuberculosis. Perhaps there is no more paternal Govt in the world than that of Japan. No wonder the people are patriotic & shout "Banzai!"」としている（Aug. 18）。一九〇四年に政府が制定した「肺結核予防に関する件」には結核の感染予防のために公共施設にたん壺を設置する規定があった[25]。マクニュールは神戸で見かけたたん壺から、政府の「干渉主義的な」側面を看取したのだろう。

第二節　警察による監視と保護

このように、マクニュールの日記は戦時下の社会の様子についての理解を描写しているが、日記の端々に警察官が頻繁に登場していることは見逃せない。

たとえば、天橋立観光を終えたマクニュール一行がホテルに到着した後のことである。ホテルの周辺を散策していると「ヨーロッパ風の服装をした一人の男性が私たちと出会い、警官であると自己紹介したA man dressed in European clothes met us & introduced himself as a policeman.」という記述が見える（Aug. 11）。翌日も天橋立観光についての記述は続く。その際、天橋立に生えている松の木の枝が折れた理由について「茶屋の主人はもやがその上に座って折れたと言ったがのちに私たちの友人である警察官は風によって折れたのだと告げたOn the point from which we looked was an old pine with a limb feebly broken off. The tea house man said the

mist sat upon[?] it & broke it off, but later our friend the policeman told us it had been broken by the wind.」という記述が見える（Aug 12）。マクニュールが〝the policeman〟と書いていることから、前日に登場した警察官を指していると推測される。この両日の記述から、天橋立観光中は警察官が同行していた可能性が高い。

では、戦時下の京都では外国人はどのような立場に置かれていたのか。藤井や竹本の研究で取り上げられていた『京都府日露時局記事』によれば、京都府内には舞鶴軍港、伏見と福知山の軍事施設、宇治の火薬製造所など「軍事上の機密に属するもの〔以下、本稿では原文の片仮名表記をひらがな表記に改めたうえで、句読点を付した〕」が存在するため、この地方に滞在もしくは往来する人物が敵国に情報を流さないように未然に防ぐ必要があったという。そのうえで、次のよう指摘する。

> 又開戦後漸く日を経るに至りては、外国人殊に上海在住の外人を敵国に於て買収し我国情を探らんとするの計画をなしつつありとのことなりしかば、避暑若くは観光を名とする外国人に対しても、注意視察せしむることとせり。(26)

マクニュールは「上海在住の外人」に該当しないが、上海を経由して日本に来ていた。そのため、警察は諜報活動を行ってロシアに情報を提供するおそれのある外国人として、マクニュールも監視の対象としていたのではないかと考えられる。

ただし、現地の警察にとってみれば、外国人は監視の対象であると同時に保護の対象でもあった。『京都府日露時局記事』はロシア人やロシアと親交のあったドイツやフランス人に対して「不穏の行動をなす者」がいない

とは言えなかったため、戦争勃発前から京都に居住していた外国人や「戦時中観光其他の為め来京せる外人には直接間接に警戒保護を加へた」結果、「幸にして事なきを得たり」と報告している。その原因として、国民に対して「徒らに外国人に暴行を企つるが如きは野蛮の風習にして文明国人の敢て為すべきことにあらざるを示し以て自重心を惹起せしむることに努め」たことと「警戒保護の厚か」ったことを挙げている。[27]

もちろん、『京都府日露時局』には「真の観光客に不安の念」を与えないように注意を喚起したともあり、[28]天橋立であった警察官も外国人との接触に細心の注意を払っていたことは間違いない。ただし、観光目的であっても京都への外国人の往来は監視と保護の対象とされ、マクニュールたちの行動に制限が加えられたことは想像に難くない。

なお、警察官についての描写は天橋立観光にとどまらない。八月二八日にマクニュール一行は大阪の駅のホームで満洲に出征する兵士を目撃する。すると「その後、一人の警察官がやってきて、もし私たちが軍隊の移動を観察したなら名前と住所を告げねばならないと言って、私たちの国籍を尋ねてきたAfterwards a policeman came up & asked our nationality, saying that if we watched the movements of the troops we must give our names & addresses.」とする（Aug. 28）。ただし、大阪における外国人の取締の実態は今後の課題とする。

第三節　日本におけるキリスト教伝道の認識

戦時下の社会を描写する一方で、マクニュールは日本のキリスト教伝道の歴史や現状についても強い関心を示していた。

たとえば、ヘーデン夫妻は、マクニュールに対して日本のキリシタンが禁教高札撤廃後に長崎の友人（宣教師

のこと）に会いに出てきたというエピソードを語っている（Aug 14）[29]。この人物は関西学院で教鞭をとった南部メソジスト監督教会宣教師のトーマス・ヘーデン（Thomas Henry Haden）と考えられる[30]。そして、日記の欄外には「キリスト教は日本では一七世紀と一八世紀の間、そして一八七三年まで拒絶されていたChristianity refused in Japan during 17th & 18th centuries & down to 1873.」というメモ書きがある。マクニュールは、日本におけるキリスト教伝道解禁についての諸情報をヘーデンから得ていたのだろう。

また、日本に滞在していた宣教師たちから各種報告書の提供を受け、日本のキリスト教伝道の現状について理解を深めていたことが次の記述からうかがえる。

日本で活動するいろいろなミッションの複数の報告書を読み、非常に興味深く感じた。数年のうちに外国人宣教師たちは日本で多様な地位につくだろうし、それどころかむしろ長老教会にはすぐに顕著な変化が起きるだろう。現在はとりわけ福音伝道や教育の努力に対して広い機会をもつ時期である。教会が神によって復活させられるとき、どれほどそれが伝道の力となるか、そしてここに中国の希望があるかもしれない（Aug. 17）。

Reading combined report of the different missions at work in Japan & found it profoundly interesting. It is quite evident that in a few years the foreign missionaries will have a different position in Japan & in fact in the Pres-Church at any rate[?] there is already a marked difference. Still it is a day of wide opportunity especially for evangelistic & educational effort. When the church is truly revived by the Divine Spirit what a missionary power she will be & here perhaps is China's hope.

マクニュールは、日本におけるキリスト教伝道の発展に希望を抱くと同時に、日本における伝道活動の進展が中国にも良い影響を与えるだろうと予測している。

しかし、同時代の日本では、日本人クリスチャンや宣教師が戦時体制に協力していたことも事実である。たとえば、本多庸一（メソジスト教会）や小崎弘道（組合教会）は、従軍布教師や従軍慰問使の派遣、軍人に対する激励や伝道、戦地や内地での軍人用小冊子の配布・印刷を目的として、募金を呼びかけた。また、本多庸一は日露戦争を文明国である日本が専制国家であるロシアを変革するための戦いであるとして、いわゆる義戦論を展開したことで知られる[31]。竹本の研究は、京都在住の宣教師が資金を出し合って遺家族の救済に尽力したこと、外国人医師が遺家族の無料診療を計画したこと、同志社のラーネッド女史が救護活動を行ったことなどを紹介したうえで、外国人の戦争協力が新聞紙上で強調されていたと指摘した[32]。

これに対して、マクニュールは大阪訪問の記録として、「女性がベビーオルガンを演奏している間、〔中略〕日本人の布教者が小冊子を配っているのを見た。その女性は実ににこにこ顔だった。その隣の■■〔一字不鮮明〕では、女性と少女が祈祷文を暗唱する間、仏教の出版物を配布する仏教の僧侶がいた。Found a Japanese preacher distributing tracts, while a woman played on a baby organ [...]. The woman's face just beamed. At the next —— was a Buddhist priest distributing Buddhist literature while a woman & girl recited prayers.」と記す（Aug. 28）。この記述の判読には慎重な検討が必要だが、少なくとも戦時協力を行っていた現地クリスチャンや宣教師に対する印象や感想は記されていない。

第三章　日露戦争終結前後の日本認識

第一節　講和会議への関心

一九〇五年五月二七日から二八日にかけて連合艦隊が日本海海戦でバルチック艦隊を破ると、六月一日に高平小五郎駐米公使がローズヴェルト米大統領に講和のあっせんを要請し、八月一〇日からポーツマスで講和会議が始まった[33]。マクニュールは天橋立観光から有馬温泉に戻ったころにこの一報に接し、「講和会議がポーツマスで始まった。私たちはみなその交渉が成功することを祈っている The peace conference has begun at Portsmouth & we are all praying that the negotiations may have a successful issue.」とする（Aug. 12）。その後は、ロシアと日本の講和会議の様子や[34]、新聞の号外によって各種のうわさが広まっていたことを書き留めるなど、マクニュールは講和会議の行方を注視していた[35]。

このとき、桂内閣は八月二八日に伊藤博文、山県有朋、井上馨の三元老が出席した閣議において、無賠償・無併合でも講和に応じることを決定した。これは、財政負担の限界、動員兵力の不足、さらには前線で指揮を執る将校の損耗といった観点から、戦争継続を難しいと判断したためとされる[36]。

一方、日本側の講和条件はロシア側のリークによって事前に報道されていたため、八月三一日には講和会議が決着したと日本国内の各紙が報道した[37]。日記にみえる、「公的な声明ではないものの、日本とロシアの間の和平が批准されたという話を聞いた Heard that news of peace between Russia & Japan had been confirmed, although no official announcement.」との記述は、日本国内の報道からの伝聞であろう（Aug. 31.）。

翌九月一日になると、大阪朝日新聞は講和条約破棄を訴える記事や社説を掲載し、翌二日には講和問題同志聯

合会が五日に日比谷公園での演説会や懇親会を開催し、枢密顧問官へ陳情を行うようを呼び掛けた[38]。マクニールはブライアン（詳細不明。関西で活動していた宣教師か）の言として、彼が活動する伝道地域（瀬戸内海か）では住民が、「ロシアと取り決められた講和条件を聞いてかんかんに怒っていると言うSays the people are wild about the terms of peace arranged with Russian.」としている（Sep 4）。

九月五日にポーツマス条約が調印されるが、日本がこの講和条約で獲得したのは、日本の韓国に対する監督権、旅順・大連の租借権と長春以南の鉄道およびその付属地、南樺太とその島嶼部、そして沿海州とカムチャッカの漁業権であった。しかし、講和内容を屈辱的とした一般民衆の怒りの矛先は、政府に向けられた。東京では同日午後一時過ぎから講和反対国民大会が始まる。そして、ここに集まった群衆が御用新聞として批判を浴びていた国民新聞社の施設を破壊し、内務大臣官邸に乱入した。さらには都市下層民による警察署や派出所の破壊焼き討ちが都内各所で発生し、翌六日には浅草のキリスト教会や関係者宅もその被害にあった。この混乱は、七日になって近衛師団及び第一師団が出動したことで収束に向かう[39]。以上が日比谷焼き打ち事件の経緯である。

この事件の詳細は時間差でマクニールのもとにも伝わったようである。六日の日記には「講和条件への批判で埋め尽くされた新聞はほとんどすべて反対している。人々は憤慨し、政府が規制しようとしている国民大会を開いているNewspapers full of criticism of peace terms nearly all adverse. People very indignant & holding mass meeting which the Govt is seeking to restrain.」（Sep. 6）と、前日の五日に開催された講和反対国民大会の様子が語られている。

そして、七日になってから「昨日の新聞は講和条件をめぐって東京で発生した暴動の記述でもちきりである。多くの警察署が群衆に破壊されたYesterday's paper full of accounts of rioting at Tokio over peace terms.

Many of the police station destroyed by mob.」と記した（Sep. 7）。しかし、この時点で彼がキリスト教会襲撃の一報に接していたのかどうかは不明である。

第二節　日比谷焼き打ち事件と「伊勢神宮不敬事件」

他方で、日比谷焼き打ち事件を書き留めた数行後にみえる次の記述が着目される。すなわち、「ブライアン氏が言うには、数年前、日本の文部大臣が靴を履いて帽子をかぶったまま神社に入り、神殿を覆っているカーテンを杖で払いのけたという。その直後、彼はその神社冒瀆のために議事堂において包丁で刺されたMr. Bryan says that some years ago the Minister for Education in Japan went into a Shinto Temple with his shoes & hat on & pushed aside a curtain covering a shrine with his stick. Shortly afterwards he was stabbed with a butcher knife in Parliament House for his desecration of the temple.」との記述である（Sep. 7）。マクニュールはなぜ「伊勢神宮不敬事件」を日記に書き留めたのか。

まず、「文部大臣」とされるのは、森有礼である。一八四七年に薩摩藩士の家に生まれた森有礼は、藩が創設した洋学開成所で英学に触れた後、一八六五年にイギリスに留学しロンドン大学で学ぶ。しかし、藩財政の窮乏をうけて、一八六七年にアメリカに渡航し、宗教家トーマス・ハリス（Thomas Lake Harris）が主宰するキリスト教系コミュニティ新生団に参加した。一八六八年六月に帰国した後、森は明治新政府のもとで米国駐在公使、清国駐在公使、さらには条約改正交渉を担当する駐英全権公使を歴任した。一八八四年にヨーロッパから帰国したのち、一八八五年一二月には伊藤博文内閣の文部大臣として入閣し、各種学校令を制定した人物として知られる[40]。

次に、伊勢神宮不敬事件の経緯を見てみよう。森は教育施設視察の途上の一八八七年一一月に伊勢神宮を訪問した。この際、鳥居をくぐって内宮に進もうとしたところ、神官に制止され、最敬礼をして退出するという事件が起こった。実際は、側門を通じて内部に入ることは可能だったにもかかわらず、神官の策略により森は御帳をくぐって参進を試みたため制止される格好になってしまった。これは、森を極端な欧化主義者、クリスチャンと誤解した神官たちが、神道の国教化否定や編暦事業の再編に反発していたために引き起こされたと考えられている。[41]

実際、「日本の文部大臣が靴を履いて帽子をかぶったまま神社に入り、神殿を覆っているカーテンを杖で払いのけた」という行為は神官が流布した根拠のない噂だったと考えられている。[42] しかし、一九世紀末に日本に関する数多くの著作を残したローエルは「報ぜられたような振舞をしたということについてはほとんど疑いを容れない」[43]と指摘しており、（マクニュールを含む）外国人はその行為を真実として受け止めたと考えられる。

最後に、森有礼の暗殺の経緯である。一八八九年二月の早朝、永田町の自宅で森が大日本帝国憲法発布の式典出席にむけて準備しているとき、急用を口実に山口県士族の西野文太郎が面会を求めてきた。そして、森が二階の自室から下りてくると、西野は伊勢神宮に対する不敬行為の報復として出刃包丁で暗殺に及んだ。[44] マクニュールの、「その直後、彼はその神社冒瀆のために議事堂において肉切り包丁で刺された」という記述は、殺害現場が「議事堂」ではなく自宅であったこと以外に、大きな誤りはない。

逃走を企てた西野は護衛官に殺害されたが、ローエルは新聞各紙が西野の行動を称賛したことを指摘し、「外国人にとっては、暗殺者に捧げられる、こういった死後の人気というものは、気味の悪いものであった」と評する。[45] 犬塚孝明も、ドイツ人医師ベルツの日記を引用し、西野を英雄視する新聞の論調や西野の墓参りをする民

衆の様子にベルツ自身が異常性を感じ取っていたことを紹介している。[46] ローエルが指摘する「気味の悪いもの」もしくはベルツの指摘する異常性とは、暗殺者を称賛するようなナショナリズムの高まりであっただろう。

一方、藤野裕子が指摘するように、戦時中の日本では各種メディアの過剰な戦勝報道、提灯行列や祝勝会の開催、さらには「露探（ロシアのスパイ）」摘発などを通じてナショナリズムが高められていったが、「戦時下に即席で高められたナショナリズムは、瞬時に政府批判に転じる可能性を秘めていたのである」。[47] 藤野は日比谷焼き打ち事件の背景の一つとして都市部における男性労働者の急増を指摘するが、[48] 少なくとも事件の一報に接したマクニュールは、伊勢神宮不敬事件にみられるナショナリズムの高まりと関連付けて、戦時下におけるナショナリズムの暴走を肌で感じ取っていたと想像される。

おわりに

本稿では、マクニュールの日記を手掛かりに、日露戦争末期の京都・神戸・大阪の様子を紹介した。本稿における初歩的な考察で得られた知見は以下二点であろう。

一つ目は、日記に記録された戦時下の社会の様子である。日記には兵士たちの出征の様子、負傷兵の存在や民衆の生活苦などが各所に記載されていると指摘した。ただし、マクニュール自身が警察の監視対象となっていた可能性が高く、ある程度の行動の制限が加えられたと考えられる。また宣教師としての立場上、日本のキリスト教伝道に対する理解を深めようとした姿勢も垣間見える。二つ目は、日露戦争終結前後の様子である。マクニュールは日本滞在初期から講和会議の動向を注視していた。しかし、政府の妥協的な講和に対して日比谷焼き打ち事

件が発生すると、伊勢神宮不敬事件の顛末から、戦争末期の日本におけるナショナリズムの暴走にも注意を向けるようになったと考えられる。

これに関しては、一八九五年から一九〇二年にかけて同志社で学んだ松岡荒村が注目される。彼は一九〇四年七月に結核で夭逝するが、早稲田大学在学中に社会主義に強い関心を抱き、日露戦争開戦後は『平民新聞』で非戦論を訴えると同時に、「君が代」批判を通じて高まりゆく愛国意識に警鐘を鳴らした。[49] マクニュールが戦争末期に目撃したのは、松岡ら非戦論者が批判したナショナリズムの高まりそのものだったのかもしれない。

本稿は日記という一次史料に依拠した初歩的な研究である。今後は、マクニュールが日本で交流した宣教師に関する資料の収集や日本滞在がマクニュールの後の活動に与えた影響など、より多面的な分析が課題となるだろう。

(注)

(1) 彼の経歴については、拙著『華南中国の近代とキリスト教』(東京大学出版会、二〇一七年、第五章)にて概説した。また、オンラインで確認できる『マクニュール家族文書』の書誌情報にはマクニュールの家系についての簡明な解説も含まれている(https://hakena.otago.ac.nz/SCRIPTS/MWIMAIN.DLL/14321102 2/2/8/3961?RECORD&DATABASE=DESCRIPTION&UNION=Y 二〇二〇年一一月一日閲覧)。

(2) 大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争:帝国への歩み』刀水書房、二〇〇三年。

(3) 藤井松一「日露戦時下における地方経済の動向:「京都府日露時局記事」を中心に」『歴史評論』第二八八号、一九七四年四月、四四―六二頁。竹本知行「戦時下の市民生活:京都の場合」『軍事史学』第四一巻第一・二合併号、二〇〇五年六月、一六七―一八三頁。上田学「近代日本における視覚メディアの転換期に関する一考察:日露戦争期京都の諸団体による幻燈及び活動写真の上映活動を中心に」『アート・リサーチ』第四号、二〇〇四年三月、一〇九―一一九頁。

(4) 中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』岩波新書、一九九六年、第四章。

（5）小泉凡「来日外国人のみた日露戦争：ラフカディオ・ハーンと戦時下の日本」『明治聖徳記念学会紀要』第四一号、二〇〇五年六月、六三―七六頁。

（6）石本理彩「日清・日露戦争における外国人記者の処遇について：従軍に関する諸規則を中心に」『交通史研究』第九二巻、二〇一八年三月、一―二四頁。

（7）本稿に関連し、筆者はかつて明治学院大学キリスト教研究所発行の小冊子『あんげろす』第七三号（二〇一七年七月、二―三頁）に「ある在華宣教師の日本（人）イメージ」と題したコラムで、マクニュールの日記を紹介した。しかし、本稿執筆に際しては各種資料を追加し、内容を大幅に改めた。

（8）April 20, 1905. [...] Along at Mr. Boggs'. Talking about Japan. 以下、本稿で取り上げる外国人名の英語表記は以下の文献に依拠している。*Directory of Protestant Missionaries in China, Japan & Corea for the year 1904*, Hongkong: the "Daily Press" Office, 1904. 本資料はイェール大学神学図書館のウェブサイトで公開されている（https://web.library.yale.edu/divinity/digital-collections 二〇二〇年一一月一日閲覧）。

（9）June 5, 1905. [...] Along to see Mr. Boggs & had talk about Japan. To engage passage.

（10）June 21, 1905. [...] McKays[sic] intend going to Japan.

（11）"Table Talk," *The Outlook*, August 26, 1905, p. 5.

（12）July 4, 1905. Boggs started off for Japan.

（13）"Table Talk," *The Outlook*, September 9, 1905, p. 4.

（14）February 10, 1904. [...] Japan declared war with Russia to-day but really commenced hostility on Monday. Decisively on side of Japs.

（15）April 14, 1904. Across ferry & along to Pak Ts'uen. Saw a Paak T'ong man catching crab who had been in all the Kam Shan & Japan as well but said he was still poor.

（16）December 31, 1904. [...] In afternoon along with Messrs Burkwall & Boggs & Mawson went to see the Japanese Buddhist monastery on Fati. The Jap-priest was at another temple & had talk with his interpreter. [...]

（17）April 18, 1903. [...] Went right out to Koon T'in. At that village saw a man- sing Loh- in charge of a pig bristle establishment.

had been in Japan. Mr. Boggs & he had conversation in Japanese.

（18）有馬温泉周辺の地名や駅名に関しては小沢清躬『有馬温泉史話』（五典書院、一九三八年）などを参照した。

（19）福知山聯隊史編集委員会編『福知山聯隊史』福知山聯隊史刊行会、一九七五年、八―九頁。編成当初、本部は大阪府下東区に置かれていたが、一八九八年八月には兵舎の完成に伴い福知山町に移転した（同上書）。

（20）同上書、一〇―三六頁。

（21）同上書、三六頁。

（22）大濱徹也、前掲書、一七〇―一七一頁。

（23）大濱徹也、前掲書、一七二―一七四頁。

（24）大濱徹也、前掲書、一七七―一七八頁。

（25）青木正和『結核の歴史：日本社会との関わり　その過去、現在、未来』講談社、二〇〇三年、一三八―一三九頁。

（26）「軍事視察人の取締」『京都府日露時局記事（稿本一一、一二）』出版社不明、一九〇六年。本稿執筆に際しては「京都府立京都学・歴彩館デジタルアーカイブ（公開）」で公開されている画像を閲覧した（http://www.archives.kyoto.jp/webseartbpe/二〇二〇年一〇月三〇日閲覧）。

（27）「敵国及交際国人の保護」『京都府日露時局記事（稿本一一、一二）』、前掲書。

（28）「軍事視察人の取締」『京都府日露時局記事（稿本一一、一二）』、前掲書。

（29）August 14, 1905. After supper we all went out to Mr. & Mrs. Scott's. There met a Mr. & Mrs. Haden & several ladies. Heard some interesting facts about the remnants of the old R. C. mission in Japan. Not long ago a Japanese who had spent all his life in a village in the interior went down to the coast to visit a friend at Nagasaki[...] 一八六五年の浦上天主堂建立を契機とした「キリシタンの復活」については、海老名有道・大内三郎『日本キリスト教史』（日本基督教団出版局、一九七〇年、一二〇―一二一頁）などに詳しい。

（30）学院史編纂室「関西学院事典　増補改訂版」https://www.kwansei.ac.jp/r_history/r_history_m_001222/detail/r_history_008574.html（二〇二〇年一〇月三〇日閲覧）

（31）大濱徹也、前掲書、二〇三―二〇五頁。これ以外に日露戦争中の宗教界の動向は小川原正道『近代日本の戦争と宗教』（講談

社選書メチエ、二〇一〇年、第五章）にも詳しい。

(32) 竹本知行、前掲論文、一七五頁。

(33) 飯塚一幸『日本近代の歴史三　日清・日露戦争と帝国日本』吉川弘文館、二〇一六年、一二二―一二三頁。

(34) August 16, 1905. [...] Negotiation for peace still going on but Russian unwilling to pay an indemnity & cede Saghalien.

(35) August 23, 1905. Every now & then a newspaper rumor comes round with "extras" re peace conference. Has a number of bells strung on waist band at the back & as he runs they ring.

(36) 飯塚一幸、前掲書、一二三―一二四頁。

(37) 飯塚一幸、前掲書、一二四―一二五頁。

(38) 飯塚一幸、前掲書、一二五頁。

(39) 飯塚一幸、前掲書、一二四―一二六頁。

(40) 本節で紹介した森有礼の経歴は、犬塚孝明『森有礼』（吉川弘文館、一九八六年）の各章を参照した。なお、森が新島襄のアメリカ留学をあっせんし、彼に私立学校の創設を勧めていたことはよく知られている（同上書、一三〇頁）。

(41) 犬塚孝明、前掲書、二八八―二八九頁。

(42) 犬塚孝明、前掲書、二八九頁。

(43) 伊吹浄編・中村都史子訳『日本と朝鮮の暗殺：ローエル・レポート』公論社、一九七九年、一三二頁。

(44) 犬塚孝明、前掲書、二九八―三〇〇頁。

(45) 伊藤浄編・中村都史子訳、前掲書、一三八頁。

(46) 犬塚孝明、前掲書、三〇〇―三〇一頁。森暗殺に対する民衆の反応は、一坂太郎の近著『暗殺の幕末維新史：桜田門外の変から大久保利通暗殺まで』（中公新書、二〇二〇年、二二六―二二七頁）でも若干触れられている。

(47) 藤野裕子『民衆暴力：一揆・暴動・虐殺の日本近代』中公新書、二〇二〇年、一一〇―一一五頁。本文中の引用箇所は同上書一一五頁にみえる。

(48) 同上書、一一八―一三二頁。

(49) 『同志社百年史　通史編一』学校法人同志社、一九七九年、四八二―四八八頁。